

ちょっとブレイク  
読書の時間  
〈最終回〉

J. D. Salinger 著

*The Catcher in the Rye*

『ライ麦畑でつかまえて』(野崎 孝訳)

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(村上春樹訳)



山岡憲史

J. D. Salinger のこの小説は1951年に出版された。爾来、半世紀を経てもなお読み継がれる名作である。

16歳の高校生 Holden Caulfield は、成績が振るわず、名門 Pencey 校から退学処分を言い渡される。クリスマス休暇前の土曜の夜、彼は同室の男と喧嘩をして寮を飛び出しが、親元に退学通知が届くまでは家に帰らないと決意し、ニューヨークに戻って怪しげなホテルに投宿する。それから日曜の夜まで、友人やガールフレンドたちに会ったり電話をかけたり、田舎出の女の子たちとダンスを踊ったり、ポン引きに金を巻き上げられたり、しこたま酔っぱらったりする。大好きな妹の Phoebe に無性に会いたくなつて、日曜の夜にはほんの一時こっそり家に帰る。翌月曜日、「家を出る」というメッセージを届けて Phoebe を学校から呼び出し、二人で公園に行き、回転木馬に乗る妹を見て、Holden が雨でずぶ濡れになりながら、とても幸福な気分になるところで話が終わる。

ストーリーは至って単純。しかし、この小説が読み続けられる理由は、「子どもの夢と大人の現実との衝突」の中で、「心のつながりを求めて遍歴を続ける」若者の姿に時代や空間を超えた共感を持つことができるゆえであろう（引用は野崎孝氏の解説による）。そしてそんな Holden の姿が、「青春の限りない喪失感」を描き続けてきた村上春樹氏をして、新たな文体での訳出へと駆り立てたのだろうか。

### Holden 少年

Holden は嘘つきで（I'm the most terrific liar you ever saw in your life.），偽名を使ったり嘘ばかり言っているにもかかわらず、欺瞞に満ちたことを毛嫌い

する。教師、級友、大人たち、芝居や映画、Fuck you. の落書きに至るまで、あらゆるものに対し辛辣な言葉を繰り出す。そして気持ちがすさんだり、めげたり、反吐を吐きそうになつたりばかりしている。

ようやくデートの約束を取り付けて一緒にスケートをする Sally に、Holden は次のように話す。

“Well, I hate it (=school). Boy, do I hate it,” I said. “But it isn't just that. It's everything. I hate living in New York and all.” [Chapter 17] (野崎訳：「ところが、僕はいやでいやでたまんないんだ。チエッ、実にいやだね」僕はそう言った。「しかし、それだけじゃないんだな。何もかもなんだ。ニューヨークに住んでたりなんかするのもいやなんだ」／村上訳：「ところがさ、僕は学校ってのが大嫌いなんだ。うん、とことん嫌いだ。」と僕は言った。「でも学校だけじゃないんだ。すべてについてそうなんだ。僕はすべてのことに対する慢感がないんだよ。ニューヨークに住むこととかね】

結局このデートは、やにわに駆け落ちの話を切りだした Holden が Sally の気を悪くさせた挙げ句、 “You give me a royal pain in the ass, if you want to know the truth.” (野崎訳：「正直言って、僕は君と会っていると、ケツがむずむずするんだ」／村上訳：「君みたいなスカスカ女には限りなくうんざりだよ。はっきり言わせてもらえばね」) と言ってしまって、ひどい結果に終わる。

### やんちゃ坊主 vs 内気な青年

両訳を読み比べてみたいと思ったのは、『朝日新聞』5月11日の読書欄で中条省平氏の文章に接したからである。「30年前に野崎訳で読んだとき、ホールデンは、

下町のべらんめえ口調でまくしたてるやんちゃ坊主といった感じだったが、村上訳では、山の手言葉でああでもないこうでもないと愚痴る引っ込み思案の少年という印象である。」

そんな違いの現れた部分を引用してみよう。

It was a terrible school, no matter how you looked at it. [Chapter 1] (野崎訳：すげえ学校さ，どう考えたって。／村上訳：どう転んでもとことん救いのない学校なんだよ。)

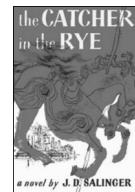
“Don’t tell her I got kicked out, willya?” [Chapter 4] (野崎訳：「おれがおん出されたこと，彼女に言うなよな，いいな？」／村上訳：「僕が退学になるってこと，彼女に言わないでな」)

But if a girl’s quite young and all and she does it (=putting her hand on the back of your neck), it’s so pretty it just about kills you. [Chapter 11] (野崎訳：しかし，まだ若かったりする女の子がそんなふうにすると，とってもきれいで，こっちはもう参っちゃいそうになるぜ。／村上訳：でもすごく若い女の子にそんなことされたら，その仕草の可憐さに，君だってぐっときちゃうはずだよ。)

Girls. You never know what they are going to think. [Chapter 18] (野崎訳：女の子か！女の子ってのは何を考え出すかわかったもんじゃないぜ。／村上訳：女の子たち。彼女たちがいったい何をどう考えるのか，こればかりは謎だよ。)

## 時代を写す 2つの訳

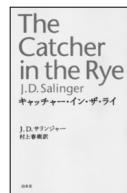
phoney (インチキ) の連中に goddam と言っては腹を立て，何もかもに depressed と感じる Holden であるが，小さな子どもや純粋な女性には大変な好感を持つ。夭折した弟 Allie には God, he was a nice kid. と未だに尊敬の念を持ち続けているし，妹 Phoebe を You never saw a little kid so pretty and smart in your whole life. と褒めたたえ愛し続ける。Phoeby に “You don’t like anything that’s happening.” と言われて落ち込み，好きなものを 1 つ挙げるよう言われると，I’d just be a catcher in the rye and all. と答える。(これは Robert Burns の詩の一節 “If a boy meet coming through the rye.” を，“If a boy catch a



*The Catcher in the Rye*  
(Little Brown & Co., 1951)



『ライ麦畑でつかまえて』  
野崎孝訳 (白水社 初版 1964)  
4-560-07051-2 ¥820



『キャッチャー・イン・ザ・ライ』  
村上春樹訳 (白水社 2003)  
4-560-04764-2 ¥1,600

boy coming through the rye.” と間違えて覚えていたことが原因なのだが。) すなわち，子どもばかりが遊んでいるライ麦畑で，崖から落ちそうになる子をつかまえてやる catcher である。Holden の心の中には，大人や社会の嘘臭さとの対局にある，子どもの純粋な夢を守りたいという願いがある。

そんな少年の心の複雑な裏を 2 人の訳者は共感を込めて描き出そうとしている。原文の独特的文体や言葉遣いを「日本語に訳すことは至難である」と野崎氏が語るように，2 つの翻訳にはその苦心の跡が忍ばれる。また I certainly began to feel like a prize horse’s ass, [Chapter 12] を野崎氏は「僕は次第にいらいらして落ち着かなくなってきた」，村上氏は「なんだか自分が間抜けの親玉になったような気がしてきた」と訳しているあたり，2 人の解釈や個性の違いが表れている。

しかし，訳を比べてどちらが原文に近いかというような議論は無意味であろう。『週間読書人』5月30日号で千石英世氏が述べているように，「若者を包囲する既成システム」が冷戦時代と 9.11 以降とでは大きく変わり，べらんめえ調でいらっしゃと冷めた反抗を示す野崎ホールデンと，切々と「君」に語りかけながら反抗を表現する村上ホールデンに，それぞれの時代がオーバーラップしているように感じられる。

(やまおか けんじ・滋賀県立米原高等学校教諭)